

3-1 第4文型 (SVO₁O₂) の正体

— O₁とO₂の「本当の」関係は？

1 O₁ ≠ O₂という理解でよいのか？

動詞の後ろに2つの名詞が並ぶ場合、SVOOの第4文型(二重目的語構文)とSVOCの第5文型の2つの可能性があります。その一般的な見分け方・判別方法としては、一般に名詞と名詞の間にbe動詞を置いてみて、例えば「名詞 is 名詞」が成り立つか、つまり、前の名詞と後ろの名詞の間にイコールの関係が成り立つかどうかということがよく言われているようです。

■ 従来のSVOOとSVOCの判別法

〈SV 名詞 名詞〉と続く場合：「名詞+be動詞+名詞」(イコールの関係)が成立するかどうか

- ① 名詞=名詞(イコールの関係)なら ⇨ SVOC(第5文型)
- ② 名詞≠名詞(イコールでない)なら ⇨ SVO₁O₂(第4文型)

- We elected Mr. Smith leader of the party.
S V 名詞 名詞

⇨ Mr. Smith is leader of the partyなのでSVOC(第5文型)

※ elect OC「OをCに選ぶ」の場合、Cの名詞は無冠詞

【訳】「我々はスミス氏を党首に選んだ」

- On Japanese Valentine's Day girls give boys chocolate.
S V 名詞 名詞

⇨ boys are chocolate(×)ではないのでSVO₁O₂(第4文型)

【訳】「日本のバレンタインデーには、女子は男子にチョコをあげる」

ただし、この判別法は間違っているとは言えないまでも、本質を突いているとは言いがたい面があります。特にSVOC(第5文型)の場合には、ただのイコール関係では説明がつかないケースがでてくるなどの不備があるだけでなく(p.106)、SVOO(第4文型)の場合も、

イコールでなければ何でもよいというわけではありません。では、あらためて両者の関係はどのようにとらえたらよいのでしょうか？

2 O₁がO₂を持つ

もう一度先ほどの文で、O₁とO₂の関係を考えてみましょう。

- On Japanese Valentine's Day girls give boys chocolate.
S V O₁ O₂

O₁とO₂、つまりboysとchocolateの関係は確かにイコールではありません。しかし、見方を変えてみると、girlsがgiveしたことにより、O₁(=boys)はO₂(=chocolate)を手に入れた、すなわち、「O₁がO₂を所有する」という「所有関係」が成立することがわかります。

■ girlsがgiveした結果 → boysはchocolateを手にする

⇨ O₁ have O₂ (boys have chocolate) の関係が成立

ということです。この所有関係をつかむことで「与える」という訳語だけではわかりにくい次のような文も理解することができます。

- Even though many of the pyramids are in ruins, they still **give** us some idea of the magnificence of ancient Egypt's civilization.

* in ruins 廃墟になって magnificence 雄大さ、荘厳さ

この文を直訳すると、「ピラミッドの多くは廃墟になっているとはいえ、今なおピラミッドは古代エジプト文明の荘厳さに関して何らかの考えを与える」となりますが、giveの後続のusとsome ideaとの間にhaveを補い、所有関係に注目してみると、

they(=pyramids) still give us some idea of the magnificence ~
S V O₁ O₂

→ we **have** some idea of the magnificence ~

「我々が古代エジプト文明の荘厳さに関してある程度の考えを持つ」
→「ある程度理解することができる」

となり、すっかりしたわかりやすい日本語になります。全体は「ピラミッドの多くは廃墟になっているが、ピラミッドにより古代

エジプト文明の雄大さを我々はある程度理解できる」となります。

また、giveはいわば第4文型の代表ですが、所有関係はgiveの場合だけでなく、第4文型をとる動詞すべてに当てはまります。

- In 1964, the Norwegian Nobel Committee **awarded** Dr. King the Nobel Peace Prize.

「1964年ノルウェーのノーベル賞委員会はキング牧師にノーベル平和賞を授与した」

ここでは動詞awardedの後ろが「名詞＋名詞」になっています。

In 1964, the Norwegian Nobel Committee awarded Dr. King

S V 名詞

the Nobel Peace Prize.
名詞

この2つの「名詞」の間にはhaveを補って考えることが可能です。

→ Dr. King **had** the Nobel Peace Prize.

「キング牧師がノーベル平和賞を手にした」

動詞awardは意味的に「キング牧師がノーベル平和賞を手にする」ことの、いわばアシスト役にすぎないことがおわかりでしょう。award O₁O₂で「O₁にO₂を与える、受賞させる」という意味になります。逆に言えば、awardという動詞をよく知らなくても、所有関係からある程度の意味を推測することができます。(ただし、第4文型動詞は一般に「授与動詞」と呼ばれるからといって、必ずしも「与える」という意味になるとは限りません。しかし、その場合でも「O₁がO₂を持つ」という所有関係は生きています。この点についてはp.096でふれます)

3 haveの「所有」について

ここでいうhaveの「所有」とは、狭義の意味の所有(持っている)だけでなく、「経験」や「体験」「習得」といった広義の意味での所有まで含めて考えてください。例えば、

- Let's **have** lunch at the new restaurant.
「例の新しいレストランでお昼にしようよ」

この文におけるhaveはeatの意味と解すことができます。また

- We **had** a good time at the party last night.

「夕べのパーティは楽しかったよ」

この文でのhaveはa good time(楽しい時間)を味わうといった「経験」を表します。そこで、SVO₁O₂の文に立ち返って、再度O₁have O₂の意味を考えてみることにします。

- She showed me the picture.

S V O₁ O₂

この文では彼女が見せてくれたからといって「私(O₁)はその絵(O₂)を所有する」ことにはなりません。少なくとも「見せてもらっている間は、私はその絵を一時的にせよ自分の手元に持っている」こととなります。また、

- I read him the letter.

S V O₁ O₂

の場合も、彼はその手紙を所有したというよりも、読んで聞かせた結果「彼はその手紙の内容を習得・理解した」という意味です。

また、O₂がthat節の場合、he *has* that ... (×)という構造自体がとれません(that節を目的語にとれる動詞は思考・感情・認識・発言系のみ→p.071)が、haveを「情報を習得・理解する」ととらえれば、himとthat...の関係をhe *hears* that ..., he *knows* that...のように考えることができます。ここでhaveにあてた「所有」という言葉はあくまで便宜上のもので、動詞haveの持っている多義性から考えてみていただきたいと思います。

4 こんな動詞もSVO₁O₂に?!

第4文型の代表的動詞giveと同じく、「O₁をO₂に与える」という意味になるものの、通例は別の語義で覚えることが多いために誤訳や勘違いを誘発しがちなものがあります。

- do: 通例「する」⇔ SVO₁O₂「O₁にO₂(益・害など)を与える」

- Smoking will **do** you more harm than good.
S V O₁ O₂

「喫煙は人に益よりも害を与える→有害無益だ」

このように、doがO₁O₂をとる場合は「する」ではなく、「与える」という意味になります。ただし、この意味のdoは、例文のgood(益)とharm(害)のほか、justice(正当性)→「公平に評価する」、credit(功績)→「正当に評価する」、a favor(施し)→「願いをきいてやる」、などO₂に来る名詞がほぼ決まっています。また、これらの名詞をO₂にとる場合は、doをgiveに変えることはできません。

- allow: 通例「許す」⇔ SVO₁O₂「O₁にO₂を与える」

- Our company **allows** us 24 paid holidays a year.
S V O₁ O₂

「うちの会社では年間で有給休暇が24日与えられる」

「小遣い」のpocket moneyはイギリス英語で、アメリカ英語ではallowanceですが、これはこの「与える」の意味から来ています。

- afford: 通例「する余裕がある」⇔ SVO₁O₂「O₁にO₂を与える」

- Music **affords** us a great deal of pleasure.
S V O₁ O₂

「音楽は我々に多くの喜びを与えてくれる」

- yield: 通例「屈する」⇔ SVO₁O₂「O₁にO₂をもたらす」

- These undertakings will **yield** us a considerable profit.
S V O₁ O₂

「これらの事業で我々はかなりの利益を得るだろう」

その他、earn(通例「お金を稼ぐ」)も、earn O₁O₂で「O₁にO₂を得させる」などの用法があります。

まとめ

- 第4文型(SVO₁O₂)のO₁O₂の関係は、O₁ have O₂という所有関係であることを理解する
- doやallowなど意外な動詞が第4文型をとる場合がある

3-2 第4文型と第3文型の転換について

—— 意味は同じなのか？

1 実は、He gave me a book. ≠ He gave a book to me.

次のような説明を目にされた方がいらっしゃると思います。

「第4文型の文、例えば、I gave him a book. (僕は彼に本を上げた)

は、him = O₁、a book = O₂を入れ換え、前置詞のtoを用いて、I gave a book to him. (第3文型)に言い換えることができる」

しかし、この2つの文は等価ではありません。(そもそも、I gave a book to him.が第3文型と言えるかどうかについても問題があるのですが、それは第6章(p.173～)でふれることにします)ここでは「情報構造」という原則が関係してきます。この言葉を聞き慣れない方もいらっしゃると思いますが、簡単に述べれば次のような原則です。「情報構造」についてもっと知りたい方は拙著『英文法の真相75』に詳しく説明してありますので、そちらをご覧くださいいただければ幸いです)

- 旧情報(既知情報)⇔原則としてなるべく前におく
- 新情報(重点情報)⇔原則としてなるべく後ろにおく
- 英語の語順は「旧情報」から「新情報」へ

これを、先ほどの文を例にとって確認してみましょう。

- ① I gave him a book. 「彼に本をあげた」

S V O₁ O₂ (=新情報)

⇔ a bookが重点情報：彼にあげたのは本であることに重点がある

- ② I gave a book to him. 「本を彼にあげた」

S V O₂ 前+O₁ (=新情報)

⇔ himが重点情報：本をあげた相手は彼であることに重点がある

①の新情報(=重点情報)はO₂であるa bookです。つまり「彼にあげたのは何であるのか」に重点が置かれています。それに対し、②の重点情報はto himであり、「本を誰にあげたのか」に重点が置